

Title	在日福建省福清人の移住・生活・エスニシティ： 国境を越える移住者の社会適応とネットワークの構築
Sub Title	The immigration, life and ethnicity of the people from Fuqing city in Fujian province in Japan: Chinese immigrants adapting to Japanese society and building social networks
Author	李, 国慶(Li, Guoqing)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.32 (2004.) ,p.61- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20040001-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

在日福建省福清人の移住・生活・エスニシティ¹⁾ ——国境を越える移住者の社会適応とネットワークの構築——

李 国 慶

1. 研究テーマと目的

一. 研究テーマ

本研究の出発点は、中国社会科学院重点プロジェクト「現代中国における社会階層と移動調査」にある。福建省福清市は、臨海部の先進地域の典型例として、この調査地の一つに選定されている。筆者は2000年6～7月にかけて福清市に滞在して、社会的階層アンケート調査を実施し、さらに2001年4月にインタビュー調査を行った。これらの調査を通じて、現地の社会的・経済的な状況を理解し、また一部の帰国者の仕事や生活を調査することができた。

これらの調査から、1949年以前に日本に渡った福清籍老華僑と1980年代以降に日本に渡った福清籍新移民のそれぞれが故郷に膨大な財的支援を提供しており、そのことが地域の社会的・経済的振興に大きく貢献していたことを知見として得ることができた。福清市が中国の2,000ある県と市の中で、基礎的経済競争力上位100位以内に入ることができたのは、まさにこの理由によってであった。つまり、福清市の社会変動を分析するためには在日福清人の移住・生活・エスニシティなどの要素に着目することが不可欠なのである。

一方、従来の移住者の研究では、ともすれば本人の出国時や日本での生活、労働の状況に研究が集中しがちであった。移住者の出身地や帰国者の状況については、追跡調査の困難さもあり、ほとんど行われていない。しかし、移住者や帰国者は、現地との関係を何らかの形で保ち続けているのであり、その影響について分析することは、エスニシティについての理解のみならず、長期的で国際的な経済的・人的な交流や協力を考える上でも無視できない重要性をもつと考えられる。

そこで、本研究のテーマは、1920年代以降、福清市から日本に渡った合計3万人の移

民を母集団に、彼らの移住・生活・労働の実態を描き出し、この移民グループのエスニック意識と戦略を分析することとした。さらに、この分析を通じて、移民と地域住民との合理的コミュニケーションを促進する道を模索することとしたい。このことは、日本と中国との長期的な交流や協力を考えるための基礎的条件の解明につながると考えている。

二. 研究目的と意義

理論的な意義は、この調査研究を通じて、アジア地域における移民の生活実態を把握し、グローバルな時代における都市変容の中のエスニックな要素を分析し、都市社会学の発展に寄与することにある。具体的には移住者がどのように母国の文化に基づき、新しい都市生活に溶け込んでいくのか、また移住者がどのように新しい都市生活に適応しつつ自分たちの文化を保持していくのかである[町村 1999 : 11-30]。

実践的な意義は以下のとおりである。2000年6月19日、58人の福建省の密航者がイギリスのドーバー港へフェリーに乗ってきた冷蔵車の中から、死体で発見された事件がおこった。その大半は福清市の住民だったのである。この事件は日本にとって無縁のことではなく、90年代初めにバブル経済がはじけるまで、日本は福清市居住者が出稼ぎに行く主要な目的地の一つであった。在日中国人をみても福建籍の者がかなり多く、その福建籍のなかでは福清市出身者が最多数を占めている。80年代以降、2.5万人に上る福清居住者が多様なルートから日本に渡り、多くが中華料理店や物産貿易会社などで働いている。彼らは、年間一人当たり数百万円の資金を地下銀行経由で福清市に送金している。東京にいる福清出身者の多くは、池袋のような老朽化した居住施設が多い都心地域で生活し、その居住地は東京北部に広がりつつある。そこで彼らは、独自の人間関係ネットワークを築き、新しい社会圏を形成している。

一方、日本華僑華人聯合総会のリーダーも、その多くは1949年以前に渡日し、企業を興した福清市出身者となっている。つまり、中国から日本への移住者を考える場合、福清という地域とその出身者は決定的に重要な意味をもっているといえる。

現状における日本人研究者の在日福清出身者に対する評価は、賛否両論にわかれている。しかし、その議論のどれもが、彼らの行動規範や生活実態を十分に理解せずに行われているのではないだろうか。そこで、本研究を通じて、在日福清出身者の行動規範を解明することから、中国移民の生活実態を描き出すこととしたい。

2. 在日福建人華僑の特質

一. 移民の「送出地」としての福清市の特質

1. 「僑郷」としての福清市

福清市は福建省の東南、福州とアモイの間にある。人口は約 117.9 万で、その内、農業人口は約 103.9 万人である。福清市は歴史的に有名な華僑の故郷（僑郷）であり、1998 年の市の統計データによると、華僑と香港・マカオの在住者は全部で約 62 万人であり、その内華僑は約 54 万人で、香港・マカオの在住者は約 8 万人である。

1949 年以前の華僑は 73 の国や地区で生活し、主として東南アジア諸国に集中している²⁾。日本在住中国人の約 39 万人の中で、3 万人は福建から来た人々であり、その中でも福清からの来住者が最も多い。東京・神戸・京都・函館などの福建華僑懇親会のリーダーは全て福清人である。現在日本在住の福清籍老華僑（老華僑とは 1972 年以前の移住者）は 5,000 人前後いる。彼らの二世・三世を含めると 1 万人に達している。

福清人は中国のユダヤ人と呼ばれ、バンチャー精神を持ち、商売に長じている。彼らは長年の努力の結果、相当規模の経済的基盤を築きあげてきた。しかし、1949 年以降から 1970 年代末期にかけて、正常なルートによる海外移民は中止された。

80 年代の改革開放政策実施以降、長年抑圧された海外移動の願望が再び噴出した。この時期以降海外に渡った人々は新移民と呼ばれ、高山鎮・龍田鎮・江陰鎮の出身者が中心となった。新移民の最初の目的地は日本であった³⁾。80 年代以降の 2.5 万人の新移民を含めて、日本にいる福清籍の中国人は 3 万人を超えている。しかし、90 年代のバブル経済崩壊後、北アメリカや西ヨーロッパ及び南太平洋地域を目指すようになった。

福清市は、地元では「万国建築博覧館」と呼ばれている。帰国者が故郷で建てた東洋風から西洋風までの多種多様の別荘型住宅は、同地域の人々の海外移住を促すデモンストレーションの役割を果たし、高級な別荘を建てるのが同地域の人々の人生目標となっていた。また、帰国者が海外に行きたい人に融資する社会システムができており、海外に行って蓄財してくることはこの地域での若者のライフスタイルになっており、今後も持続していくと見られている。

2. 発展モデルとしての福清市経済

1970 年代の末まで、福清市は「サツマイモ市（地瓜県）」として名が知られていた。臨

海地域にあるにもかかわらず、土質は砂地で、灌漑用水も不足していて、生産量が低かったためである。その上、人口が多く、一人当たりの耕地面積は0.4⁴畝（1畝は6.7a）しかなかった。人口管理が極めて厳しかった文化大革命の間でも、多くの人が建築労働者として出稼ぎにいき、多い時は10万人にも達していた。そして、福建省の60余りの市の中で経済水準は中の下に止まっていた。

80年代の末まで、福清市は農業中心の県であった。1990年末、福清市は初めて外向型経済の発展を目指し、華僑資本の導入を切り口にして外資系資本を導入し、地元内部の資金投資と連動させる戦略を策定した⁴⁾。福清市は1987年から1998年までの12年間、600社の外資系企業を導入し、総資産は32億元に達し、その内華僑資本は80%を占めていた。隣の晋江市とは異なって、福清の三資企業（外資企業が中国に進出するときにとる3つの企業形態）は規模が大きく、全国三資企業ランキング上位500社に入っている企業は7社もある。1998年に三資企業の総生産高は145億に達し、市の総生産高の46%を占めている[李 2001：32-34]。

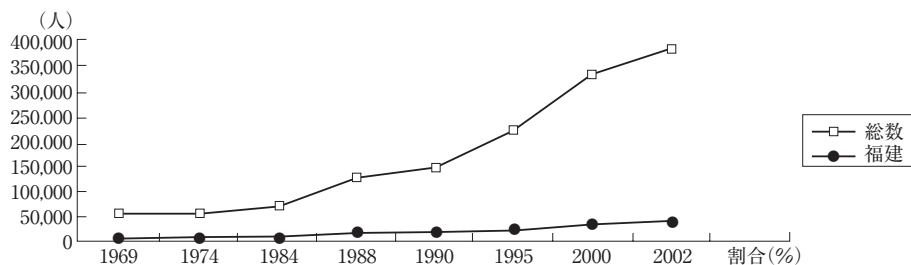
3. 在日福建人華僑社会の現状

人口の多い地域から見ると、福建人華僑は遼寧（49,885人）、上海（48,795人）、黒竜江（43,624人）、台湾（39,255人）、吉林（34,338人）について第6位を占めている。

表1 在日福建人の概況

年次	1969	1974	1984	1988	1990	1995	2000	2002	割合 (%)
総数	51,448	46,944	67,895	129,269	150,339	222,991	335,575	381,225	100.0
福建	6,193	5,178	5,725	13,737	17,497	19,952	27,532	30,677	8.0

出典：田島淳子「在日中国人の現在」、『アジア遊学』第39号，2002年，P.99。

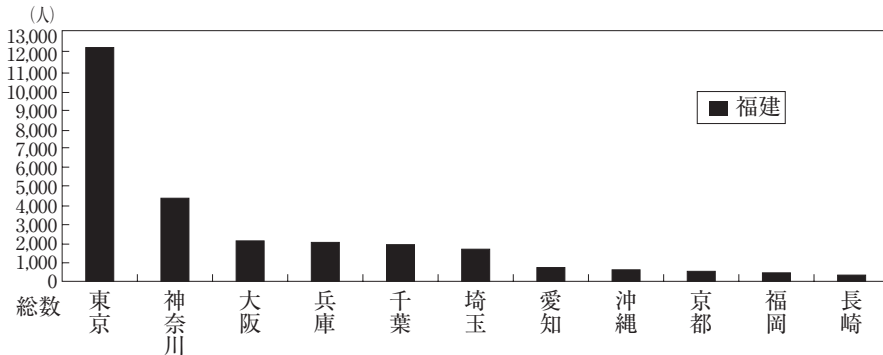


1972 年末、在日老華僑は約 4.8 万人で、半分は台湾系で、半数は大陸系であった。大陸系の内訳を見ると、福建、広東、その他の省がそれぞれ 1/3 を占めていた。在日福建人の内、ほとんどが福清人である。これは地域の伝統や社会的ネットワークの特性によるものである。閩南人は南洋を下り、長楽人は西洋を下り、福清人は東洋を下るといわれている。

表 2 2002 年都道府県別 福建籍登録者（上位 11 位）

県別	総数	東京	神奈川	大阪	兵庫	千葉	埼玉	愛知	沖縄	京都	福岡	長崎
総数	381,225	102,559	30,747	30,447	17,142	22,045	23,914	18,405	1,839	8,080	10,169	2,452
福建	30,677	12,175	4,437	2,194	2,108	1,941	1,707	714	589	541	406	321

出典：『在日外国人統計』（財入管協会，2003年）



戦後初期は全国各地に散らばっていたが、現在は関東、大阪圏に在住の福建人が多い。約 3 万人の福建人のうち、約 1.2 万人が東京に在住し、4,000 人が神奈川県に在住し、首都圏が総数の半分以上を占めている。

現在、老華僑は神戸・京都の比率が高い。中華街での比率をみると、最も多いのは広東人（15%）であり、次は台湾人（11%）で、第 3 位が福建人（6%）である。新移民の比率は、東京・横浜で高い。

二. 在日福建人華僑社会の形成

1. 近代における三回の福建人来日ピーク

歴史上、福建と日本とのつながりは長く、福建人は日本に対して文化的なアイデンティティを持っている。

(1) 閩人三十六姓は首里の王府に招聘され、明の政府に派遣されて琉球王国に渡って朝貢貿易の手伝いをした職能集団である。外交文書の作成や通訳、航海、礼儀作法などに関わる仕事に従事し、高い文化的・社会的地位を得た。その後裔は先祖のことを誇りに思い、「当時の琉球は未開の社会であった。三十六姓の貢献がなければ、琉球文化の発展がなかった」と考えている[李 2002 : 282-286]。

また、従属理論の創始者フランクに従えば、17世紀までの中国は世界の中心であり、日本が中国に学んだ時代である。隠元和尚（1592～1673、福清出身、林氏の子）の弟子が長崎興福寺に招請されて日本に渡る途中、海難で死亡した。師の隠元は弟子也瀬が渡航を果たさずして死んだことを悲しみ、再三の懇請を受けて63歳の年に長崎に渡り、黄檗宗万福寺を開いた。江戸幕府で将軍の謁見を受け、京都の寺院を授けられ、日本に定住した[鎌田 1983 : 401-404]。京都の万福寺では毎年10月に普渡勝会が一週間の期間で開催され、数百人の福建籍華僑が祭りにくる。普渡勝会は在日福建人によって行われているもっとも重要な宗教的活動である。また、福清市にある万福寺も在日華僑の賛助を受けて修復されている。

こうした歴史的交流は現在の福建人来日の重要な背景になっている。「明朝まで、福清人は日本の文化や経済発展のために大きく貢献した。アヘン戦争や日清戦争以降、中国は衰退し、日本は産業化を果たし強国になってきた。現在では福建人と日本との交流は文化的領域から経済的領域に転換し、中国は日本に学ぶようになったが、歴史的に見れば日本が中国の復興を援助するのは当たり前だ」と考える人はかなり多い。

(2) 福清の華僑一世の来日は、清末から1920年代に集中していた。その背景は、清朝が崩壊し中華民国が成立してまもなくのころであり、世の中はまだ動揺しており、庶民は依然として極めて貧困な状態に置かれていた上、既に海外への門戸は開放されていたので、海外へ行くことは、それまでのどの時代よりも手軽になってきていたからである。

一方、日本は明治維新を経て1905年に日露戦争に勝利し、経済勃興期にあった。特に重化学工業の発展によって、海外の安い労力への需要の増加傾向が見られた。日本では1921年から中国人労働者の入国が急増したが、同時に不正入国者も少なからずいたため、1924年（大正13年）には取り締まりが強化された。この時期は近代における福清華僑の日本移住の第一回のピークとなった[市川 1991 : 148-151]。

(3) 戦時中、多くの福清人は差別や虐待を免れるために福清市に帰った。その時に日本人配偶者や子供を連れて帰ったので、結果として福清市に多くの日本人「残留婦人」が現れた。1972年国交正常化以降、日本人「残留婦人」の身分が認められ、日本に帰国するこ

とが許された。その後、70年代から80年代にかけて来日した人は日本人「残留婦人」の親戚関係をたどって合法的に入国した者が多く、福清人来日の第二のピークであった。

(4) 1988年以降、第三の来日のピークが現れた。この時期の福建人新移民の大部分は日本語学校就学の名義で来ている若い人である。中には偽装結婚で来ている者もいる。

2. 来日目的

政治的、社会的理由で来日した人もいたが、経済的理由で来日した人がもっとも多い。明清時代の商人や僧侶たちの出国理由とは大いに異なり、その特徴として戦前来日した福清人の中には下層農民が多数を占めていることから明らかである。中には、帆掛け舟で福州と長崎の間を往復し貿易をやっていた人や大変裕福な家の子弟もいたが、少数であった[市川 1991 : 144-48]。

1988年以降の大半の移住者は、蓄財のために日本に来ている。生活苦のため来日した人もいるが、生活に困らない人が商売を通して立身出世しようとする人が多い。彼らの生活態度はまじめであるが、目的は「目を閉じて5、6年苦勞して、故郷で家を建て、結婚して、そして家の墓を造る」ことである。これが福清人の生活パターンになっている。

3. 職業

(1) 華僑の多くは「三把刀」(料理人の包丁、仕立屋のはさみ、理髪屋の散髪ばさみ)に頼って生計を立てていた。例えば、広東人は主として飲食業を経営し、横浜と神戸に集住していた。山東人は床屋が多かった。

これに対して、福建人の職業は異なっていた。戦前では「三把刀」がわずかしこ占めておらず、反物行商(生地の移動販売)が大半を占めていた。生地の販売システムは卸売り、中間の卸売商と一番下の行商から構成されていたが、行商をやるにはあまり多くの資本金を必要とせず、卸売り商人から生地を借り入れ、売った後に資金を返還することが許された。さらに、日本語ができなくても生地販売をすることができた[市川 1991 : 160-162]。

日清戦争から4年後の1899年(明治32)年、勅令第352号及びその施行細則である内務省第42号によって中国からの労働移民は事実上禁止されたが、禁止された労働種目から行商が除外されていた。何故なら、1920年代に日本の紡績技術が大きな発展を見せ、生地の生産量が大幅に増えたため、多くの小売商を必要としたからである[許 1989]。在日福建人は同じ村の人を呼び寄せて、大都市で大きな問屋を設け、また中間都市で旅館を生地の受け取りや業務連絡の場所として利用した。さらにその下に日本列島全土に散在す

る小売商がいるため、系列販売システムがつくりあげられた。在日福建人は長崎、横須賀の他、三重県、栃木県、石川県など全国分散型であり、辺鄙な農村部に行けば行くほど商売がやり易かったそうである。

(2) 戦後、福清人は反物行商をやめて、関東の華僑は飲食産業や不動産、関西の華僑は商売や貿易に投資するようになった。

4. 学歴

一世の老華僑は学歴が低く、二世も学生時代が戦時中であったため勉強できなかった。三世になると学歴が高くなり、大学卒業者が多く出てきた。

新移民としてやってきた福清人の学歴は、二極化する。一方では、まじめに勉強して日本の大学や企業に就職した人がおり、学歴が徐々に高まってきている。ごく僅かであるが、大学教授になった人もいる。他方では、大半の人は蓄財を目的としており、日本で3K労働に従事し、高度な技術を習得していない。そのため帰国後、企業を起こす人や教育・文化活動に従事する人は少ない。

5. 福清帮の強い結束力

全国では東京・横浜・大阪・神戸・京都・福岡・長崎・函館・千葉・大分・熊本・鹿児島に12の福建同郷会が設置されている。東京福建華僑懇親会は毎月一回の無尽講のほか、春節の親睦会・夏の納涼会を行って若い人が出会う場所を作り（この場で知り合って結婚する若者もいる）、活発な活動を展開している。また、無尽講は経済的な相互援助よりも、社会的交流が目的である。

また、全国規模の同郷懇親会が開催されているのは福建籍の華僑だけである。1961年に第一回同郷懇親会が京都で開催されて以来、毎年一回開催されている。同郷懇親会は常設機関を置かず、毎年各地の同郷懇親会が順番に準備作業を引き受ける。2003年6月21～23日にかけて岡山で第43回同郷懇親会が開催され、参加者は115名であったが、例年平均して300名前後が参加する。

全国規模の福建同郷懇親会が43回も継続できたのは、林同春を中心とする「三林一張」のキーパーソンの存在に大きくかかわっている。現在神戸華僑総会名誉会長を担当する林同春氏は日本華僑連絡会の要職についた経験もあり、福建だけではなく、在日華僑のリーダーの一人でもある。

もう一つの理由は、在日福建人が強い同郷関係をもっているだけではなく、さらにお互

いに親戚関係を結んでいる点である。「東京の福建籍老華僑はみんな親戚だから、決して他の福建人の悪口を言ってはいけない」という話はよく聞かれた。福建人はハーフにならないように子供を福建人同士で結婚させるのである。毎年の全国懇親会は親戚に会う機会でもあるから参加者が多く、しかも長年持続できたのである[林 1982 : 183]。

時代の変遷に伴って、同郷懇親会の構成にも大きな変化が見られたが、基本的には同郷懇親会は老華僑や老華僑の二世三世の交流の場である。華僑と新移民とのつながりはそれほど強くない。その原因は老華僑が長年の努力によって、すでに自営業者に成長し、社会の上層に位置していることによる。老華僑は、故郷の若者に日本に来て勉強をしてほしいが、仕事のきつい肉体労働者になることには反対であった。

また、世界福清人大会も毎年開催されており、中核組織はインドネシアに置かれている。

6. 対日感情と帰属意識

一世からの影響や少年時代の苦しい体験により、二世の人は日本に対して暗いイメージを持っている。戦時中に「チャンコロ」と呼ばれたり、「中華街」が「南京街」と呼ばれたため、「南京虫」とも呼ばれたりしてひどくいじめられたからである。

中国は国の政策として、華僑が居住国の国籍に加入するよう提唱するが、この政策は日本に限っては華僑たちの激しい反対にあった。一例を挙げると、「愛国、愛郷と中日友好」を目的とする福建同郷懇親会岡山大会開会式での中華人民共和国国歌斉唱の場面は、非常に印象的であった。在日老華僑は感情的に日本社会に融合することができず、生存のために一生懸命に適応しているだけである。彼らは日本で永住はしたいが日本には帰化したいと思わない。

こうした対日感情は、華僑の社会的・経済的地位と密接な関連がある⁵⁾。在日華僑はアメリカほど自由に経営を展開することができず、経済的地位が低かった。また、国籍を簡単に取ることができないため、選挙権がなく、また被選挙権がないため独自の政党をつくることもできず、華僑の政治家も現れていない。

しかし、華僑三世になると、「原郷」概念が徐々に淡泊化してきた。一世が考える「落葉帰根」から「落地生根」へと変化し、帰属意識に大きな変化を見せている。

もちろん、グローバル化の進展や日本の人口・産業構造の変動に伴って、日本も徐々に変わりつつある。2004年から日本で新しい国籍法が実施され、両親の片方が日本人であれば子供が満18歳以降、自分の意志で日本の国籍に加入するかどうか決めることができるようになった。在日福建省福清人のエスニシティは大きく変わりつつある。

注

- 1) 関連研究として、1、2000年7月に福建省福清市で社会階層と移動研究を行った。そこでは特に、流動人口を対象とするアンケート調査を実施し、また国外に出稼ぎに行った者の出国事情についての聞き取り調査を行った。2001年4月に福清市私的経営者層を対象とする実地調査を行った。2、福建と沖縄との文化交流研究。筆者は2000年12月から文部科学省の研究プロジェクト“基地返還と地域振興”のサブ課題“沖縄と福建との文化交流”プロジェクトに参加している。
- 2) インドネシア、マレーシア、シンガポールの三カ国の在住者は福清華僑の90%を占める。そのうち経済力が最も強いのはインドネシアであり、林氏集団と蔡氏集団はセメント・小麦粉・金融・たばこ・紡績・アルミニウムなどの業界で支配的な地位を占め、所在国の経済や政治に絶大な影響力を持っている。
- 3) また、福清市の統計では、現在、新移民の数は約8.2万人にまで達している。新移民が最も多い地域はインドネシアであり、約3.2万人居住している。日本には約2.5万人、オーストラリアには約6,000人の新移民がいる。この他、シンガポールに約2,300人、アメリカに約2,100人、アルゼンチンに約3,000人、ブラジルに約2,000人、イタリアに約1,200人が在住している。
- 4) 90年代の初頭、福清市で鰻養殖がブームになり、最も多い時は400社3.5万亩養殖され、50億円の売上高をあげた。福清市は正にこれによって全国県市基礎的経済競争力上位100市に入ることができた。続いて鰻の蒲焼き事業が興り、輸出量は日本市場の40%も占めた。養殖場が増加した結果、日本の鰻業者が価格を下げたので、福清市は倒産した企業が多数出た。この他80年代中後期の車海老養殖、90年代建築ブームの時の煉瓦工場経営はいずれも赤字状態で終わった。拙論「私の企業発展のローカルな基礎——福建省福清市を中心に」『中国私営企業発展報告』2002年、中国社会科学文献出版社を参照。
- 5) 東南アジアの華僑はインドネシアなどの居住国で経済的主導権を握り、経済的地位は高い。しかし、日本は経済的に高度に進んだ国であり、華僑経済は終始周辺に位置づけられていた。

参考文献

- 市川信愛 1991『現代南洋華僑の動態分析』福岡：九州大学出版会。
- 鎌田茂雄 1983「中国仏教儀礼の日本伝播——黄檗宗万福寺を中心として」山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』東京：巖南堂書店。
- 許 淑真 1989「日本における福州幫の消長」『撰大学術』Ser. B. No.7。撰南大学撰大学術編集委員会。
- 田嶋淳子 2002「在日中国人の現在」『アジア遊学』第39号、東京：勉誠出版。
- 町村敬志 1999『越境者たちのロスアンジェルス』東京：平凡社。
- 李 国慶 2002「私の企業発展のローカルな基礎——福建省福清市を中心に」『中国私営企業発展報告』（中国語版）中国社会科学文献出版社。弘前大学人文学部編『現代化のなかの中国東北部の変動過程』（日本語版）2001。
- 李 国慶 2002「閩人三十六姓の生活史」高橋明善編『基地返還・移設・跡地利用と沖縄振興問題』その2。
- 林伯誠編 1982『旅日福建同郷懇親会“二十年の歩み”』。

*本発表は慶應義塾大学地域研究センター研究会として、2003年7月8日（火）に行われた（於：地域研究センター第一共同研究室）。

筆者紹介

李国慶 (Li Guoqing)

中国社会科学院社会学研究所副研究員（在北京）。2002～2003年、慶應義塾大学大学院社会学研究科訪問助教授。

<経歴>

北京外国語大学日本語学部卒業。北京日本学研究中心修士課程修了。慶應義塾大学大学院社会学研究科（博士課程）同課程単位取得退学。博士（社会学）。1987年中国社会科学院社会学研究所入所、実習研究員（助手）、助理研究員（講師）を経て副研究員（助教授）となり、現在に至る。この間、北京日本学研究中心社会学客員教授、東京都立大学文学部訪問研究員、弘前大学文学部訪問研究員、一橋大学大学院社会学研究科訪問研究員、トロント大学社会学部訪問研究員、慶應義塾大学大学院社会学研究科訪問助教授、常磐大学非常勤講師、筑波大学非常勤講師、金城学院大学非常勤講師を歴任。

<主要業績>

『日本農村の社会変動——富士見調査』中国社会科学出版社、1999。「地域リーダーと私的経営者」『変動する中国社会』クバプロ、2000。『内発的村庄』社会科学文献出版社、2001。『日本社会——結構特性と変遷軌跡』高等教育出版社、2001。「私営企業主在地域社会中的地位与作用」『第四次中日青年論壇』世界知識出版社、2001。「中国における官と民の関係」『Science of Humanity』（せめぎあう官と民）38号、勉誠出版、2001。「私営企業発展的の地方基礎」『中国私営企業発展報告』No.3、中国社会科学文献出版社、2002。「日本の社会」『日本社会を解読する』時事出版社、2002、など多数。

